OP-461  

tension-free vaginal mesh (TVM) 手術における術中 real time virtual navigation 法の開発

京都府立医科大学泌尿器科学1, 梅田ガーデンシティ女性クリニック2, 梅島坂放射線科クリニック3
藤原 敏枝1, 浮沢 理2, 邏 仁雅3, 山本 政美3, 伊藤 智敏2, 三木 恒治3
目的: TVM 法は急速に普及しているが, 仙巣動脈や骨盤筋喉頭管 (ATFP) への mesh 移置前には術野で深い
位置での穿刺が必要で, 安全で確実な手術のためには新鮮な
技術を要する。Real time Virtual Sonography (RVS)
は超音波画像と同様に断面の CT 画像をリアルタイム表示
できる装置である。今回は我々は, 出血などの合併症の予
防, 初学者のための learning curve の短縮, 無視した術者のより
確実な手術のために, RVG を応用した新しい navigation
system (NS) の開発を行った。方法: 手術前に撮影して
おいた MRI 画像と超音波で位置合わせを行った後に,
software で MRI 画像を再構築する。この後, 進行者の直
のセンターの動きに応じて MRI 画像をリアルタイム
で確認することができる。結果: 肺動脈症例 5 例に対して
virtual navigation を施術。進行者の直のセンターを用い自
由に ATFP を挿入できた。尿管, 闘門動脈等等も同
定可能であった。なお, 送信する装置はリング
状で, 触覚も利用可能であった。結語: 新しい NS によっ
て触覚を失うことなく, 指の動きに同期した MRI 画像を
得ることができた。これにより, 手術中に術前情報をより正
確に把握可能となり, より安全で正確な TVM 手術が可能
なる可能性が示唆された。

OP-462  

TVM 手術における術後再発予防のための子宮頸部切断術の有用性に関する検討

厚生中央病院泌尿器科
池田 良一, 中田 多佳子
【目的】TVM 手術後の骨盤筋膜症再発の中で, 子宮頸部
みが術後早期に出現することがある。当院ではこ
の再発防止の再発を予防するため, 2002 年 2 月より子宮
底動脈延長例に対して子宮頸部切除術の施行を開始した。そ
ここで, 子宮頸部切除術が TVM 手術後の再発を予防に有用である
か否かを検討した。【方法】2002 年 10 月から 2009
年 1 月までに子宮動脈延長例に子宮頸部切断術を併用せず
に TVM 手術を施行した 71 例（A 群）と, 2009 年 2 月か
から 9 月までに子宮底動脈延長例に子宮頸部切断術を併用して
TVM 手術を施行した 78 例（B 群）の再発率を比較
検討した。【結論】子宮摘出後の CTVM を除外した症例は, A
群 71 例中 60 例, B 群 78 例中 70 例であった。このうち
子宮頸部脱出をきたしたのは A 群 4 例（6.7%), B 群 0 例 (0%)
であった。また B 群のうち APT-VPM を施行した
64 例を, 子宮頸部切断術を併用した 29 例（併用群）と併
用しなかった 35 例（非併用群）に分け, 手術時間と出血
量を比較検討した。手術時間・出血量とも両群間に有意差
はなかった。【結論】子宮頸部切断術は, TVM 手術後の
子宮頸部脱出を予防するために有用で簡便な術式であると
思わわれた。

OP-463  

骨盤筋膜症手術後の後腹膜感染症
メッシュの露出とメッシュを用いない感染
が問題になった症例の分析

三井記念病院産婦人科
中田 真木, 中山 純之, 小柳 大行
メッシュ埋め込みを伴う骨盤筋膜症手術（以下, POP 手術）
の長期的な合併症に, メッシュの露出や感染の問題が知られ
ている。当院では 2002 年より後腹区画へメッシュ埋
めを行っており, メッシュを用いない後腹膜に有限感染
が出現した症例を 4 例経験している。これらは 55 〜 68
歳, 子宮を有する 0 例, 頸部がそれぞれ 3/1 例, 易感染者
に関わる条件として, 非 APPLICATION 例 1 例, 乳頭腫瘍のため
に接合を用いない 1 例が含まれる。感染症と
なったメッシュは Prolene Mesh/Prolene Soft Mesh がそ
れぞれ 2 例で, 感染の中央となった部位は前歯の埋没、
矢後, 向後後部のメッシュ固定部位, 向後後部の仙
顆動脈総合記固定部位で有で, 継合を含めた感染に対
する 2 例, 矢後後の感染を含めたものは 1 例, 導入部位の確認された時期は 4 〜 5
年と幅広かった。患者の判断で術後 1 〜 3 年で定期受診を
打ち切り, その後対応が著しく悪化したのがあった。各症
例に, 腦内出血, 狭帯道機能低下の関連した使用な
ど, 感染と関わりある問題点が見つかった。Macroporous
monofilament mesh を用いても, POP 手術後の後腹膜感
染症を完全に回避することはできない。産婦人科施設の
広い連携により, POP 手術の実施数増加に見合う術後の
フォローアップを要していくことが必要である。

OP-464  

TVM 手術の QOL 評価

梅田ガーデンシティ女性クリニック1, 桃谷藤井病院泌尿器科2
猪野 補佐子1, 山口 浩子2, 竹崎 政美2
【目的】骨盤筋膜症術後は QOL の改善を目的に治療される疾
患であるにもかかわらず, validate される日本語版 QOL
が, 評価の指標を明示的に少ない。今回我々は P 一
QOL (prolationship quality of life questionnaire) 暫定的翻訳
版を用いて TVM (tension-free vaginal mesh) 手術の術
前術後の評価を行った。【方法】対象は 2002 年 2 月から
2009 年 8 月までに手術を施行した症例に対する術前
手術 3 ヶ月後 P-QOL 評価を施行し, 評価の得られた 49
例に対し検討をおこなった。P-QOL 評価は, 以前報告
されたものを使用した。【結論】平均年齢 64.6 ± 8.2
年, 術後は手術の自覚, 気分, 身体の自覚, 日常活動
の自覚, 個人の任内関係に対する予想での改善度は低かった。【結論】TVM
手術は, 術後 QOL の改善を認めた。しかし個別にみる
と, 排便症状の改善に対する自覚が著しくなく, 社会的,
活動的制限, 個人の任内関係に関しては, 骨盤筋膜症術
で損なわれていなかったことがわかった。